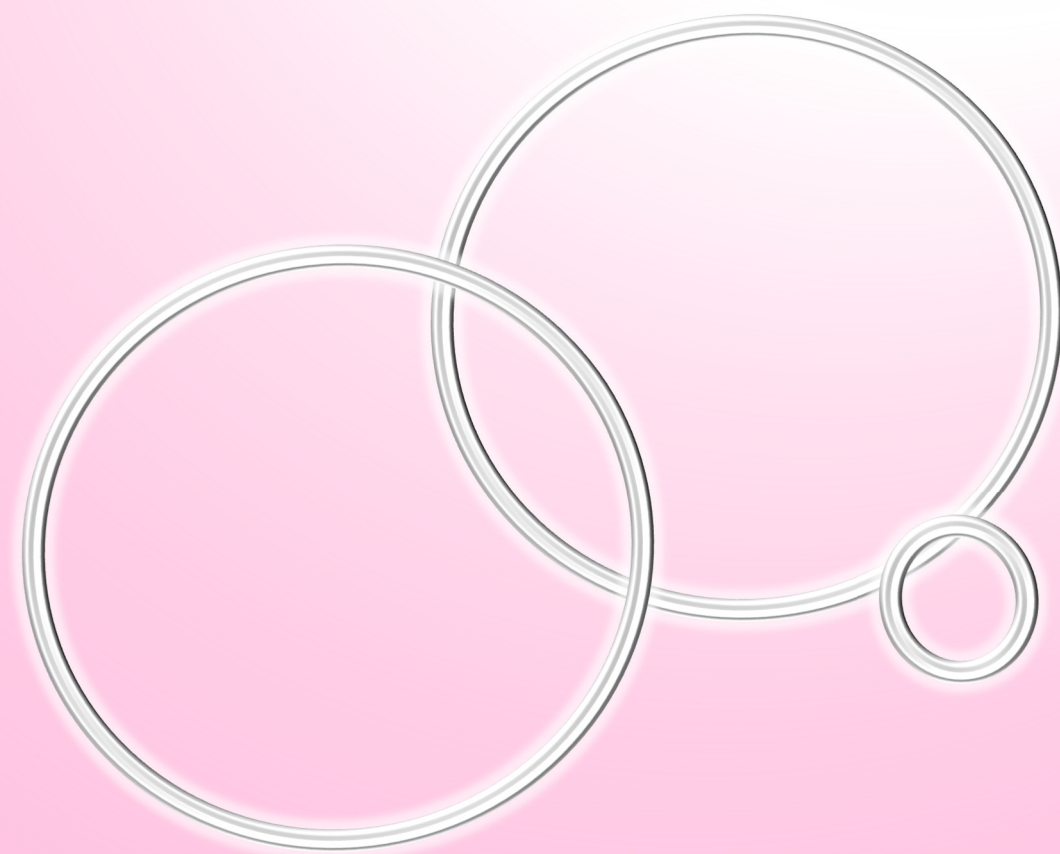


ISSN 2433-7013

日本リハビリテーション教育学会誌

第2巻 第1号



NPO:Rehabilitation Academic center (RAC)
The Society of Japan Rehabilitation Education

日本リハビリテーション教育学会誌

第2巻 第1号

目 次

原著

大学における社会人基礎力養成の一考察 今井 祐子・1-5

通所リハビリテーションにおける臨床実習アンケート調査
—学年による特性と介護保険領域への就業意識の要因— 沢谷 洋平・他・6-10

原 著

大学における社会人基礎力養成の一考察

A study on fundamental skill development as a society person in university

今井 祐子¹⁾

YUKO IMAI, RPT¹⁾

1) 国際医療福祉大学 小田原保健医療学部 理学療法学科：神奈川県小田原市城山 1-2-25 (〒250-0012)
Department of Physical Therapy, School of Nursing and Rehabilitation Science at Odawara,
International University of Health and Welfare: 1-2-25 Shiroyama, Odawara-shi, Kanagawa 250-8588,
Japan E-mail:yimai@iuhw.ac.jp

日本リハビリテーション教育学会誌 2019;2(1):1-5. 受付日 2018 年 12 月 4 日 受理日 2019 年 2 月 4 日

要旨：〔目的〕縦割りグループによる学習が，社会人基礎力に与える影響を明らかにすることである．〔対象と方法〕対象は，理学療法学科 1 年生，2 年生，3 年生で縦割りグループを作成した．方法は，縦割りグループに対して，プレゼンテーション，実技演習を行った．比較は，実施前後における社会人基礎力とした．〔結果〕学年間の比較においては，有意な差は認められなかった．しかし，学年ごとの比較では 3 年生の「考え抜く力」が身についていると思うか，「チームで働く力」が身についていると思うかにおいて有意差が認められた．〔結語〕3 年生において社会人基礎力が高くなるのは，上級生が下級生を導く機会により多く触れることが要因であると示唆された．

キーワード：社会人基礎力，理学療法士養成校，縦割りグループ

Japanese Journal of Rehabilitation Education 2019;2(1):1-5. Submitted Dec. 4, 2018. Accepted Feb. 4, 2019.

ABSTRACT: [Purpose] The purpose is to clarify the influence of group organization on fundamental skill. [Subjects and Methods] The subjects made the group the first grader, the second grader, the third grader. The group works making the presentation and mastered through skills. We compare fundamental strength of social skills before and after implementation. [Results] There were no significance in each grade. But there are significances the third grader in an ability to think and the power to work. [Conclusion] Fundamental skills were high in the third grader. It suggests providing more guidance and communicating with underclassmen.

Key Words: fundamental skill, expert practice in physical therapy, group organization

I. はじめに

現在、日本における雇用環境は大きく変化している。職業の多様化や業務内容の複雑化に伴い、大学卒業後の離職率は年々増加傾向にある。厚生労働省の調査によると、平成27年3月時点で、大学卒業後3年以内の離職率は31.8%となっている¹⁾。このような状況を改善すべく、基礎学力や専門知識以外に適応力、創造力、ストレス耐性など社会人としての能力強化が求められている。経済産業省は、2006年から職場や地域社会で多様な人と仕事をしていくための必要な基礎的な力を、社会人基礎力を定義し啓発および養成への取り組みを行っている。社会人基礎力の構成要素として、主体性、働きかけ力、実行力で構成される「前に踏み出す力」、課題発見力、計画力、創造力で構成される「考え抜く力」、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力で構成される「チームで働く力」としている。そして、地域や社会で必要となる社会人基礎力を明確にすることにより、社会に必要となる力の養成にも貢献できると考えられている²⁾。

一方、大学教育においても従来の就職活動学年における就職支援への取り組みに留まらず、大学入学より早期から社会人基礎力養成が必要であるとも考える。就職活動後の雇用ミスマッチの原因として、内山³⁾は希望職種に求められる能力と自身の持ち合わせている能力の認識不足が原因といわれている。そのような状況を改善すべく、在学中に同級生との限られたコミュニティにおける成長だけでなく、様々な考え方や経験を積んだ上級生や教員との関わり合いが必要である。また、下級生や学習内容の理解不足が考えられる者への教示を通して、他者を理解し周りと協同して取り組む姿勢が養われる。さらに、在学中の学習内容を活かして社会人基礎力を養成することが、卒業後地域や社会で活躍できる人材の育成に繋がると考える。

本学では、大学における一般教養とともに理学療法士養成校として、医療専門職の育成を兼ねた学科となっている。近年、医療職においても、関連職種

との連携、患者様や利用者様の気持ちに寄り添いつつ質の高い医療の提供が求められるという観点から、社会人基礎力が必要になると推察される。このような社会背景より、大学講義の一貫として、基礎および専門知識、専門職に関する実技を習得するため以外に、複数の学年が縦割りグループとして取り組む講義も取り入れており、同学年だけに留まらず様々な経験を積んだ学年との講義を展開している。また、この縦割りグループを「アドバイザーグループ」と呼び、アドバイザーとして教員が学生に指導にあたっている。このような取り組みを踏まえ、社会人基礎力に与える影響を明らかにすることを目的とした。

II. 対象と方法

1. 対象

A大学理学療法学科1年生43名、2年生51名、3年生46名である。グループ分けは、各学年6名程度、1グループあたり18名程度の縦割りグループを構成した。男女比および平均年齢については、各グループ均等になるよう調整を行った。

2. 方法

縦割りグループで取り組む講義内容としては、以下の内容を行った。一つ目は、プレゼンテーションに関する基礎知識を教員より教示後、グループ内の自己紹介をプレゼンテーション作成し発表した。グループのメンバーを知ること、また全体に対しての発表を踏まえ、分かりやすいプレゼンテーション作成を行った。二つ目は、今まで学んだ実技の内容を踏まえた実技演習を行った。1年生は患者役として、模擬患者を演じることやセラピスト役とのコミュニケーションを図ってもらった。2年生はセラピスト役として、今まで学んだ知識や実技を踏まえ1年生に対してコミュニケーションを図りながら実演をした。3年生は指導者役として、1年生および2年生のやり取りを観察した上で、これから必要となる知識や実技における修得が不足している部分に対してフィードバックを行った。三つ目は、学外向け大学紹介プレゼンテーションを作成し、学外から大学を見

学に来る来校者向けに、大学紹介や学科紹介のプレゼンテーション資料を作成した。各学年とも、大学を知らない人の目線で分かりやすく伝えることを主眼に置きながら作成をした。

社会人基礎力を確認するためのデータ収集方法として、アンケート内容の説明とアンケートの回答を行った。まず、アンケート内容の説明として、社会人基礎力の定義、大学生における社会人基礎力が求められる理由を紙面および口頭にて説明した。その後、アンケートの回答として、初回講義前と最終講義後に、社会人基礎力に関する項目について調査を行った。初回講義前においては、現時点で社会人基礎力の各要素がどのくらい身に付いているかを質問した。最終講義後においては、本講義を受講して社会人基礎力の各要素がどのくらい身に付いたかを質問した。いずれのアンケートにおいても項目は、社会人基礎力の構成要素である「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」とした。アンケートの回答は、それぞれの力が身に付いた程度を数値化し、全く身に付いていないを1として、身に付いていると思うほど大きな数を選択してもらい、1-10段階の10件法で記載してもらった。なお、本研究の同意について、口頭及び書面にて同意を得た学生のみを対象として行った。また、倫理審査委員会承認のもと実施した（承認番号:16-Io-153）。

統計解析は、各学年間を比較するため全設問に対してカイ2乗検定を行った。各学年における講義実施前後を比較するため、ウィルコクソンの符号付順位検定を行った。また、ソフトは、いずれもIBM SPSS Statistics ver.23を使用し、有意水準はすべて5%とした。

Ⅲ. 結果

講義前後におけるアンケートの回答は、1年生43名、2年生51名、3年生46名から得られた（表1）。

1年生の講義前における社会人基礎力のアンケートでは、「前に踏み出す力」が身に付いているかの回答において10段階中3が最も多かった。「考え抜く

力」が身に付いているかの回答において10段階中4が最も多かった。「チームで働く力」が身に付いているかの回答において10段階中4が最も多かった。講義後におけるアンケートでは、「前に踏み出す力」が身に付いたかの回答において10段階中5と6が最も多かった。「考え抜く力」が身に付いたかの回答において10段階中6が最も多かった。「チームで働く力」が身に付いたかの回答において10段階中6が最も多かった（表1）。

2年生の講義前における社会人基礎力のアンケートでは、「前に踏み出す力」が身に付いているかの回答において10段階中5が最も多かった。「考え抜く力」が身に付いているかの回答において10段階中5が最も多かった。「チームで働く力」が身に付いているかの回答において10段階中5が最も多かった。講義後におけるアンケートでは、「前に踏み出す力」が身に付いたかの回答において10段階中7が最も多かった。「考え抜く力」が身に付いたかの回答において10段階中7が最も多かった。「チームで働く力」が身に付いたかの回答において10段階中4と5が最も多かった（表1）。

3年生の講義前における社会人基礎力のアンケートでは、「前に踏み出す力」が身に付いているかの回答において10段階中5が最も多かった。「考え抜く力」が身に付いているかの回答において10段階中6が最も多かった。「チームで働く力」が身に付いているかの回答において10段階中6が最も多かった。講義後におけるアンケートでは、「前に踏み出す力」が身に付いたかの回答において10段階中6が最も多かった。「考え抜く力」が身に付いたかの回答において10段階中7が最も多かった。「チームで働く力」が身に付いたかの回答において10段階中7が最も多かった。（表1）

講義実施前および後における学年間の比較では、有意差を認めなかった。学年ごとの講義実施前後比較においては、3年生の「考え抜く力」が身に付いていると思うか、「チームで働く力」が身に付いていると思うかにおいて有意差が認められた（ $p < 0.05$ ）（表1）。

IV. 考察

全学年において、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」で、講義前より講義後の方が力は身に付いたことを示す数値の維持または上昇を得ることができた。これは、講義内容が社会人基礎力養成に必要な実践的な教育に沿った内容であったと考えられる。実践的な教育を構成する要素とは、実技を取り入れた実習の要素と教示を取り入れた講義の要素の両方が必要であるとされている⁴⁾。今回の講義では、理学療法に必要な実技を実施する実習の要素と、プレゼンテーションを行う上で必要となる技術に関する講義や知識の確認である講義の要素の両方を網羅した内容であったことから、効果が得られたと考えられる。斎藤⁴⁾によると、社会人基礎力の柱として専門知識が必要であると述べられていることから、学年間における修得知識の確認などの講義内容が専門知識の向上にも寄与したと考えられる。先行研究において看護師養成校は、自分の意思を分かりやすく伝える能力が弱い傾向であったとされていたが、本講義では上級生が下級生に教える、さらに同級生同士が教え合うという環境設定や学年間の教示状況を上級生が観察し、より良い教示方法を伝えることにより能力が向上したと考えられる⁵⁾。また、高橋⁶⁾によると、社会人基礎力は生産性活動への参入により力の定着がされると述べている。さらに、この参入には具体的経験、内省的観察、解決策立案、積極的実験により、行動—成果の因果形成が社会人基礎力の定着に繋がるとも述べている⁶⁾。今回実施した講義内容において、プレゼンテーション作成や実技演習などが情報や結果から得られる内容から資料や技術を生み出す生産性活動に該当すると考えられる。そして、他学年との学習を通して講義を経験する、他者とのコミュニケーション能力向上のため自己を内省する、グループで作り上げるための問題解決能力を育む、プレゼンテーションや実技演習への積極的参加が、社会人基礎力の定着へ寄与したと考えられる。

各学年におけるコミュニケーションの側面から社

会人基礎力養成との関係を見てみると、内閣府の調査では若者の居場所は、自分の部屋、家庭、インターネット空間が多くを占めている。対して、学校、職場、地域が低い値を示している⁷⁾。このことから、学生の日常に生活におけるコミュニケーションは、身近で限られた人間とのコミュニティを形成していることが推測される。そのため、本講義を通して教員や他学年とコミュニケーションを図る機会を増やすことにより、日常とは異なる環境で学ぶことも社会人基礎力の向上に寄与したと考えられる。鈴木⁸⁾によると、日常とは異なる環境でのグループ活動により、社会人基礎力の向上に結び付くと述べている。このことから、縦割りグループによって日常とは異なる学習形態が効果的であったと考えられる。

学年別の傾向としては、上級生になると講義前に持っている社会人基礎力は高い値を示していた。他大学における学外医療現場の見学実習では、実習前に比べ実習後の値が低くなるという結果が見られた⁹⁾。この理由として、現場で自身の能力が身に付いていないことを自覚したためであると考察している。特に、医療現場における現状を見学することにより、入学前に描いていたものと異なることから生じるギャップが影響を与えていると考えられる。また、実習において理学療法士養成課程に必要な学外実習を体験することにより、体験する前に比べ社会人基礎力が向上するという報告がある^{10) 11)}。さらに、井芹ら¹²⁾によると、各学年において経験値に応じて役割を分担し取り組むことによって、リーダーやサブリーダーに値する仕事を行った学生は社会人基礎力が向上するという報告がある。いずれの結果においても、環境の拡大、コミュニティの拡大により、役割の拡大によって社会人基礎力が変化したと考えられる。本研究では、各学年における求められる役割の違いや、学年が上がるに伴って下級生を導いていく立場となることから、リーダーに求められる役割を行うことにより数値の向上が見られたと考えられる。つまり、下級生を導くためにチームがどう動くかを考えることや、下級生とともにチームでどう動くかを考える機会に触れることにより、縦割りグ

ループ実施後の方が有意になったと考えられる。以上のことから、3年生の講義後において有意に社会人基礎力が高い要因は、上級生が下級生を導く機会により多く触れることが要因であると示唆された。本稿では、医療専門職を育成する理学療法士養成大学における、縦割りグループを用いた教育による社会人基礎力への効果を検討した。その後、初回講義前と最終講義後に、社会人基礎力に関する項目についてアンケート調査を行った。社会人基礎力の養成においては、地域を問わず専門職として取り組める能力の質の向上へと繋げることが求められると考える。堀本ら¹³⁾によると、中国においても社会人基礎力は医療職において求められる力であるとされている。加えて、日本と中国における社会人基礎力を比較すると、中国の方が高いとも述べられている。今後は、経年的な変化や入学年度の学生特性における比較を行っていきたい。

利益相反と研究助成費

論文投稿に関連し、開示すべきCOIの関係にある企業・組織及び団体等はありません。

引用文献

- 1) 厚生労働省：新規卒就職者の離職状況（平成27年3月卒業者の状況）。https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000177553_00001.html（閲覧日2018年11月27日）
- 2) 経済産業省：社会人基礎力。<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>（閲覧日：2018年11月27日）
- 3) 内山靖：理学療法学総説。医学書院，東京，2014，pp112-113.
- 4) 斎藤寧：「社会人基礎力の展開」－大学での展開への若干の提言－。比治山大学短期大学部紀要，2008，43:43-59.
- 5) 吉武美佐子・椎葉美千代・酒井康江・他：A看護大学卒業生の看護技術および社会人基礎力習得の現状と課題。福岡女学院看護大学紀要，2014，5:1-8.
- 6) 高橋浩：経験学習理論に基づく社会人基礎力向上のための実践的研究。立正大学心理学研究年報，2010，1:35-43.
- 7) 内閣府：平成29年版子供・若者白書のうち若者にとっての人とのつながり。http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/pdf_index.html（閲覧日2018年11月27日）
- 8) 鈴木良美：「自然体験学習」が看護学部学生の社会人基礎力に及ぼす有効性の検証。東邦看護学会誌，2016，13: 37-41.
- 9) 松谷信也・木村まり子・玉利誠・他：1年次の見学実習が社会人基礎力に及ぼす影響。柳川リハビリテーション学院・福岡国際医療福祉学院紀要，2015，11:24-27.
- 10) 池田拓郎・中原雅美・松田憲亮・他：臨床実習における社会人基礎力の経時的変化。理学療法科学，2013，28:11.
- 11) 中原雅美・松田憲亮・池田拓郎・他：臨床実習が社会人基礎力および情意能力に与える影響，理学療法科学，2015，30:47-48.
- 12) 井芹まい・河村茂雄：大学生の集団活動における役割体験と社会人基礎力の関連，第56回日本教育心理学会2014，56:422.
- 13) 堀本ゆかり：社会人基礎力＝日本と中国の比較＝。理学療法科学，2016，31:53-54.

原 著

通所リハビリテーションにおける臨床実習アンケート調査 —学年による特性と介護保険領域への就業意識の要因—

Questionnaire survey on clinical training in adult day-care rehabilitation
-Effects of year of education and work consciousness factors in long-term care
insurance regions-

沢谷 洋平^{1,2)}, 小野田 公³⁾, 石坂 正大³⁾, 柴 隆広²⁾

Yohei SAWAYA, RPT, MS^{1,2)}, Ko ONODA, RPT, PhD³⁾, Masahiro ISHIZAKA, RPT, PhD³⁾, Takahiro SHIBA, RPT²⁾

1) 国際医療福祉大学大学院博士課程 医療福祉学研究科 保健医療学専攻 理学療法学分野:

栃木県大田原市北金丸 2600-1 (〒324-8501)

Division of Physical Therapy, Doctoral Program in Health Sciences, Graduate School of Health and Welfare Sciences, International University of Health and Welfare:

2600-1 Kitakanemaru Otawara-shi, Tochigi 324-8501, Japan E-mail:18s3024@g.iuhw.ac.jp

2) 介護老人保健施設マロニエ苑通所リハビリテーション にしなすの総合在宅ケアセンター:

栃木県那須塩原市井口 537-3 (〒329-2763)

Nishinasuno General Home Care Center, Department of Day Rehabilitation, Care Facility for the Elderly “Maronie-en”:537-3 Iguchi Nasushiobara-shi, Tochigi 329-2763, Japan

3) 国際医療福祉大学 保健医療学部 理学療法学科: 栃木県大田原市北金丸 2600-1 (〒324-8501)

Department of Physical Therapy, School of Health Sciences, International University of Health and Welfare:
2600-1 Kitakanemaru Otawara-shi, Tochigi 324-8501, Japan

日本リハビリテーション教育学会誌 2019;2(1):6-10. 受付日 2019 年 1 月 25 日 受理日 2019 年 3 月 14 日

要旨: [目的] 当通所リハビリテーション施設における臨床実習アンケートを分析し、学年の違いによる特性、介護保険領域に対する就業意識の関連要因を明らかにすることを目的とした。[対象と方法] 当施設で臨床実習を行った理学療法士養成校学生 3 年生 12 名, 4 年生 21 名を対象とし、最終日に実習についてのアンケートを実施した。[結果] 学年間に、「医療全般の知識は増えたか」、「医療保険と介護保険領域での理学療法の違いのイメージはできたか」、「介護保険領域で働きたいか」の 3 項目について有意な差を認めた。介護保険領域で働きたいかに有意に関連のある要因は、「学年」、「理学療法の技術が身についたか」、「医療保険と介護保険領域での理学療法の違いのイメージはできたか」の 3 要因であった。[結語] 介護保険領域への就業意識を高めるためには、低学年より介護保険領域のイメージ形成が重要である可能性が示唆された。

キーワード: 臨床実習アンケート, 通所リハビリテーション, 介護保険

Japanese Journal of Rehabilitation Education 2019;2(1):6-10. Submitted Jan. 25, 2019. Accepted Mar. 14, 2019.

ABSTRACT: [Purpose] To investigate effects of year of education and work consciousness factors in long-term care insurance regions on clinical training in adult day-care rehabilitation. [Subjects and Methods] Twelve third-year students and 21 fourth-year students undergoing clinical training participated in the study. The questionnaire was administered on the last day of training. [Results] The items “Did your medical knowledge increase?,” “Could you understand the difference between physical therapy between medical insurance and long-term care insurance?,” and “Do you want to work in long-term care insurance regions?” had significantly different results between third- and fourth-year students. Factors significantly related to “Do you want to work in long-term care insurance regions?” were items concerning “year,” “Did you acquire the skills necessary for physical therapy?,” and “Could you understand the difference in physical therapy between medical insurance and long-term care insurance?.” [Conclusion] In order to increase work consciousness for long-term care insurance regions, this study suggests that image-building early in students’ university curriculum may be an important factor.

Key Words: Questionnaire survey on clinical training, adult day-care rehabilitation, long-term care insurance

I. はじめに

我が国は、2016年時点で、65歳以上の高齢者人口は27.3%に達し、世界随一の長寿国として超高齢社会を突き進んでいる¹⁾。介護保険制度は2000年度より導入され、要支援・要介護認定を受けた人は2003年度末370.4万人から2014年度末で591.8万人と221.4万人も増加した¹⁾。理学療法士は医療機関のみならず、健康増進や介護予防等も含めた領域への参入が求められている社会的背景がある²⁾。2010年の理学療法士養成校に対する求人数では、介護保険領域施設の求人が医療保険領域施設を初めて上回ったことが報告された³⁾。しかし、石坂ら⁴⁾によると、大学理学療法学科における就職先は医療機関が約90%であるとしており、介護保険領域の求人数は増加しているにもかかわらず、医療機関への就職率が高いのが現状である。急増する理学療法士の供給先を医療機関のみに期待するのならば、理学療法士の需要と供給のバランスは急速に崩れるとも言われている⁵⁾。以上のことから、高齢化に伴う社会的ニーズに対応していくために、教育場面から介護

保険領域への就業意識を高めていく必要があると考える。

臨床実習に関する教育のあり方や成果に関する先行研究は、養成校内で教員によって行われたものが多く⁶⁻⁸⁾、単一の病院や施設等の現場からの報告、特に介護保険領域に限定した報告はない。また、臨床実習では指導者が学生の成績評価を行うが、学生が指導者を評価する機会は少ないのが現状である。

本研究で対象とする施設は、介護保険領域の通所リハビリテーション施設（以下、“当施設”）であり、医療福祉系大学の関連施設として理学療法学科3年生の評価実習（3週間）、4年生の総合臨床実習（6週間）を受け入れている。そこで今回、当施設にて臨床実習後の学生への独自のアンケート調査を、臨床実習のアウトカムの指標として使用し、介護保険領域での臨床実習の状況を把握した。本研究では、当通所リハビリテーション施設において臨床実習を行った学生への「臨床実習アンケート」を分析し、学年の違いによる特性、介護保険領域に対する就業意識の関連要因を明らかにし、今後の教育方法への示唆を得ることを目的とした。

II. 対象と方法

1. 対象

当施設で臨床実習を行った理学療法士養成校学生3年生12名、4年生21名を対象とし、実習最終日に実習についてのアンケートを実施した。調査にあたっては、口頭で調査の趣旨、参加に対する任意性と同意撤回の自由、成績評価に影響しないことについて説明し、承諾を得て実施した。

2. 方法

アンケート調査は5段階リッカート尺度を用い、肯定的な表現を1点、対となる否定的な表現を5点とした（1非常に良い・満足・したい - 5非常に悪い・不満足・したくない）。質問項目は、①「実習は楽しかったか」、②「医療全般の知識は増えたか」、③「理学療法の技術は身についたか」、④「利用者の身体に触れ理学療法を体験できる頻度は満足でき

たか」、⑤「医療保険と介護保険領域での理学療法の違いのイメージはできたか」、⑥「当施設の理学療法士の指導方法について」、⑦「当施設の理学療法士の知識量について」、⑧「介護保険領域で働きたいか」、⑨「当施設で働きたいか」の9項目とした。統計処理として、3年生と4年生の2群間のカイ2乗検定と、⑧「介護保険領域で働きたいか」を従属変数とした順序回帰分析を行った。順序回帰分析に関しては、多重共線性を考慮し、⑥「当施設の理学療法士の指導方法について」と⑧「介護保険領域で働きたいか」とのSpearmanの順位相関係数が0.6以上であった⑦「当施設の理学療法士の知識量について」と⑨「当施設で働きたいか」を除いた。独立変数は、その他の質問項目、学年、性別とした。全ての統計解析はSPSS Statistics version 23（IBM社製）を用い、有意水準は5%とした。

表1. 各質問項目の得点分布と学年間におけるカイ2乗検定の結果

	1点	2点	3点	4点	5点
質問① 実習は楽しかったか。					
3年	6	6	0	0	0
4年	5	13	3	0	0
質問② 医療全般の知識（OAや脳梗塞の病態、リスク管理等）は増えたか。*					
3年	8	4	0	0	0
4年	3	16	2	0	0
質問③ 理学療法の技術（可動域訓練・歩行介助・プログラム立案等）は身についたか。					
3年	1	10	1	0	0
4年	6	12	3	0	0
質問④ 実際に利用者の身体に触れ、体験・経験できる頻度は満足できたか。					
3年	5	5	1	1	0
4年	11	8	2	0	0
質問⑤ 医療保険と介護保険領域での理学療法の違いのイメージはできたか。*					
3年	3	9	0	0	0
4年	14	6	1	0	0
質問⑥ 当施設の理学療法士の指導方法について。					
3年	8	4	0	0	0
4年	7	10	4	0	0
質問⑦ 当施設の理学療法士の知識量について。					
3年	8	4	0	0	0
4年	11	7	3	0	0
質問⑧ 介護保険領域で働きたいか。*					
3年	2	9	1	0	0
4年	3	5	11	1	1
質問⑨ 当施設で働きたいか。					
3年	0	7	5	0	0
4年	1	4	12	3	1

全ての値は実測値で表記。

5段階リッカート尺度（1非常に良い・満足・したい - 5非常に悪い・不満足・したくない）。

カイ2乗検定：* $p < 0.05$

表2. 介護保険領域で働きたいかを従属変数とした順序回帰分析の結果

独立変数	係数
学年 3年生 *	-4.529
質問③ 1点 *	9.047
質問③ 2点 *	4.433
質問⑤ 1点 *	-2.976

* $p<0.05$

有意な関連要因のみ記載。

Ⅲ. 結果

アンケートの回収率は100% (33名)であった。カイ2乗検定の結果、②「医療全般の知識は増えたか」と、⑧「介護保険領域で働きたいか」の2項目で、3年生の方が“有意に増えた・働きたい”と返答した。⑤「医療保険と介護保険領域での理学療法の違いのイメージはできたか」については、有意に4年生の方がイメージできていた (表1)。

順序回帰分析の結果、「学年」(3年生, 係数-4.5), ③「理学療法の技術が身についたか」(1点, 係数9.0), ③「理学療法の技術が身についたか」(2点, 係数4.4), ⑤「医療保険と介護保険領域での理学療法の違いのイメージはできたか」(1点, 係数-3.0)の4項目が従属変数である「介護保険領域で働きたいか」と有意な関連要因であった (表2)。

Ⅳ. 考察

本研究より、学年による通所リハビリテーション施設での臨床実習の特性として、3年生では医療全般の知識が増え、4年生では医療保険と介護保険領域での理学療法の違いのイメージ形成が良好であった。安永ら⁹⁾によると、動作分析を例に学年における着眼点の差を報告しており、本研究の結果も学年によるカリキュラムや学習進行度の影響が考えられた。また、4年生はすでに3年生の時に臨床実習で何らかの現場を経験しており、介護保険領域のイメージ形成が良好であった可能性がある。3年生は初めての長期間の実習で、リスク管理上見学時間も多

くなることから、技術面ではなく医療全般の知識が有意に増えたのではないかと考えた。

本研究の結果、3年生は4年生と比較して介護保険領域に対する就業意識が高く、学年の低い方が介護保険領域で働きたいと思う可能性が示唆された。石坂ら¹⁰⁾によると、理学療法学科学部生の興味のある専門分野は授業や臨床実習を経て変化するとしている。学年の低い時の介護保険領域における臨床実習や学内での教育は、就業意識に関連する可能性がある。また、「介護保険領域のイメージ形成」は介護保険領域への就業意識に正の関連がある一方、「理学療法の技術の習得」は介護保険領域への就業意識に負の関連があった。先行研究では、理学療法学科学部生の最も興味がある専門領域の調査において、「介護」を挙げた学生は数%のみであり¹⁰⁾、卒後にまず就職すべき施設として、病院や診療所等の医療機関が推奨される傾向にある¹¹⁾。また、医療機関と介護保険領域を併せ持つ組織は、医療機関で基礎的な理学療法の知識と技術を身に付けた後、介護保険領域に異動させ、慢性期における在宅の視点など多くの経験をさせることで成長を促していると考えられる¹⁰⁾。通所リハビリテーションにおける生活機能向上に対する理学療法や、生活モデルの思考過程が一定の就業意識に関連はするものの、卒後就職先は医療機関が約90%である現状から⁴⁾、介護保険領域での卒後人材の獲得は限界があるように思われる。また、「介護保険領域で働きたいか」に関して、理学療法の技術の習得ができた学生の方が、介護保険領域で働きたくない結果となった。これらの理由としては、理学療法技術の習得に熱心な学生は、介護保険領域以外に自己の進路志望があり、基礎的理学療法に対する学習意欲が高い傾向にあることが影響しているのではないかと考えた。通所リハビリテーション施設における実習の充実が、必ずしも介護保険領域への就業意識へ繋がらないところが、臨床実習指導の限界である。介護保険領域は科学性に対するイメージの低さが報告されている¹¹⁾。介護保険領域に対するイメージをポジティブな方向に変化させ、卒後のみならず将来的に介護保険領域へ従事する人材を育

成することが現実的であると考える。

本研究の限界は、対象施設および対象者が限定されている調査であること、アンケート内容の科学性、学生のアンケート返答に対する遠慮等が挙げられ、一般的な理学療法学生を反映しているとは言い切れないところがある。また、対象数が少ないため、今後は自施設のみならず他施設への協力依頼等、さらなる対象者の拡大が必要であると考え。しかし、理学療法士・作業療法士養成施設指定規則の改正に伴い、訪問リハビリテーション又は通所リハビリテーションに関する実習が増加する見込みであり¹²⁾、介護保険領域における臨床実習指導の際に参照できる基礎的な情報となりうる。

利益相反

本論文に関して開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) 厚生労働省：平成28年版厚生労働白書—人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える—。
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/>（閲覧日2019年1月12日）
- 2) 森本 榮：介護保険領域でのマネジメント—在宅サービスのマネジメント（経営的側面から）—。
理学療法学，2009，36：486-488。
- 3) 日本理学療法士協会：各種調査・結果—平成22年度求人調査報告書—。
<http://www.japanpt.or.jp/about/data/investigation/list/>（閲覧日2019年1月15日）
- 4) 石坂正大，久保晃，金子純一郎・他：理学療法科学部生の就職先の現状と就職先選定—3キャンパスの特徴—。国際医療福祉大学学会誌，2017，22：77-82。
- 5) 松井一人：新しい職域の中でいかに理学療法アプローチを確立するか—理学療法士の専門性とは—。理学療法学，2011，38：231-234。
- 6) 浅利和人：地域リハビリテーション施設における臨床実習教育のあり方に関する研究。理学療法科学，2009，24：895-899。
- 7) 白石和也，宮原拓也，加藤研太郎・他：実習の到達目標の達成に影響する実習指導要因の検討—学生による実習の到達目標の達成度に対する自己評価と実習指導に対する評価から—。理学療法科学，2018，33：347-352。
- 8) 甲田宗嗣，上川紀道，伊藤祥史・他：臨床実習における理学療法学生の自己評価としての成果に関する意識調査。健康科学と人間形成，2017，3：41-47。
- 9) 安永春菜，土居誠治，渡部里佳・他：動作分析時の着眼点の特徴について—2学年と3学年との比較—。愛媛十全医療学院紀要，2018，11：11-14。
- 10) 石坂正大，久保晃，金子純一郎・他：理学療法科学部生における興味のある専門分野の縦断的研究。理学療法科学，2017，32：627-630。
- 11) 藤田大介，小原謙一，吉村洋輔・他：理学療法士が目指す学生が持つ介護保険領域の職場イメージに関する調査研究。理学療法科学，2015，30：661-665。
- 12) 厚生労働省：理学療法士・作業療法士学校養成施設カリキュラム等改善検討会 改正概要。
<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000193257.html>（閲覧日：2019年1月20日）

編集委員	堀本ゆかり (理学療法士)
	柊 幸伸 (理学療法士)
	鈴木 真生 (言語聴覚士)
	寺田 佳孝 (教育学)
	鈴木 啓介 (理学療法士)
	後藤 純信 (医師)

日本リハビリテーション教育学会誌

第2巻 第1号 2019年

2019年3月25日発行

編集：NPO 法人リハビリテーション学術センター
日本リハビリテーション教育学会

〒173-0004

東京都板橋区板橋 1-11-7-901

日本リハビリテーション教育学会 事務局

URL

<http://rehaac.org/professional.html>
